

徳島県三好郡山城谷アクセントの動向

—— 二拍名詞を中心に ——

上 野 和 昭
仙 波 光 明
森 重 幸

0. はじめに
1. 若年層のアクセント
2. 年配層のアクセント
3. 山城谷アクセントの動向

0. はじめに

徳島県の西端、三好郡山城町山城谷地区は、北流する吉野川中流の西岸に位置する。その吉野川の支流に、地区内を東流して注ぐ伊予（銅山）川と白川谷川の二河川があり、人家は主にこれらの河川に沿って点在する。地区内世帯数は約1500世帯、人口は約5200人である。

同地区は、いわゆる讃岐式アクセントの地域として、池田町などの周辺町村とともに早くから紹介されていた（金沢治1934・1951、山名邦男1956、平山輝男1957a・b、宮城文雄1961）。森重幸（1958）は美馬郡一字村などとともに同地区において「二音節名詞第一類・第三類・第五類統合」という調査結果を得て、このようなアクセント体系を「山城谷式」アクセントと名付けた。同時に報告された「出合式」アクセントとともに、それ以来注目されている（金田一春彦1974・1977）。

ところで、「山城谷式」アクセントが讃岐式の分派であることは、森（1960）に早く指摘され、つづいて徳川宗賢（1962・1981）もこれを認め、近くは上野善道（1985）にもその旨の記述がある。

さて、このほど徳島大学方言研究会で同地域を取り上げたについては、森（1984・1989）などで報告されているように、若年層のアクセントの動きがはっきりしなかったからにはかならない。本稿の筆者の一人である森は早くからこの点に着目していたが、アクセント

変化の最も進んだ状況を知るべく小学校高学年の児童を対象とした共同調査を提案し、1989年10月23日に河内小学校（山城町光兼）を、さらに11月28日に大野小学校（同大野）を訪問した。いずれの小学校も、白川谷川と伊予川の流域から児童がそれぞれ通学しており、ほぼ山城谷地区の全容がつかめるといふ利点がある。本稿は、まずこれら両校の調査結果のうち二拍名詞に関わる部分について若年層のアクセントを考察し、つぎにこれと比較する意味で年配層のアクセントについても調査した結果を報告する。年配層については、すでに森（1958）などにおいて検討がなされているが、今回は両校区内の人を特に選んでご教示いただいた。以下に、今回の調査において御協力くださった方々の氏名を記して、厚く御礼申し上げます。

御氏名	(生年)	性別	生育地	調査年月日（調査者）
橋岡 清	(1924)	男	尾又	1989.10.23（森）
宮田 裕幸	(1977)	男	有宮	1989.10.23（上野・森）
平田 勝広	(1977)	男	中野	1989.10.23（上野・森）
平石嘉津也	(1977)	男	中野	1989.10.23（上野・森）
瀬川 幸代	(1977)	女	白川	1989.10.23（上野・森）
内田真由美	(1977)	女	白川	1989.10.23（上野・森）
玉岡美千代	(1977)	女	白川	1989.10.23（上野・森）
滝口美代子	(1978)	女	栗山	1989.10.23（上野・森）
佐竹 将直	(1977)	男	大野	1989.11.28（上野・仙波・森）
下大寺かなこ	(1977)	女	大野	1989.11.28（上野・仙波・森）
佐竹 朋子	(1977)	女	頼広	1989.11.28（上野・仙波・森）
黒川 剛	(1978)	男	頼広	1989.11.28（上野・仙波・森）
土橋 桂樹	(1977)	男	信正	1989.11.28（上野・仙波・森）
行川 美保	(1977)	女	小川谷	1989.11.28（上野・仙波・森）
外峯トラノ	(1905)	女	小川谷	1990. 7. 8（上野・仙波・森）
外峯 久延	(1928)	男	小川谷	1990. 7. 8（上野・仙波・森）
外峯日出子	(1934)	女	岩戸	1990. 7. 8（上野・仙波・森）

なお本稿では、音調上の高拍を●で、同じく低・中高・下降拍をそれぞれ○◎●であらわす。また今回の調査は、調査文を読んでいただく方法によった。

1. 若年層のアクセント

ここにいう若年層とは、今回調査した小学校高学年児童を指す。1977年から1978年に生まれた男6名（河内小3名・大野小3名）女7名（河内小4名・大野小3名）、計13名に調査した結果を報告する。

二拍名詞第1類の音調は、単独で○●、ときに●●または◎●が聞かれる。河内小では15語について、大野小では19語について聴取したが、個別に変化したかと思われる「鈴」を除いては、●○が聞かれることは稀である。両校共通に調べた14語について、児童数13人であるから、少なくとも182回の聴取機会があったことになるが（2種の音調が聞かれた場合はそれぞれ1回ずつに数えて、実際には183回。以下同様）、うち142回（77.6%）までが○●に聞かれた。●●と◎●とは合わせて38回（20.8%）であった。付表からも明らかに、●●ないし◎●にいう場合が多い人でも14語のうち6語程度（42.9%）までではある。また、語別にみても「枝・竹・水」においてそれぞれ5/13（38.5%）6/13（46.2%）5/14（35.7%）となるのが上限である。しかし、これらの値は決して低いものではなからう。音調レベルでは、たしかに○●が代表的ではあるが、●●や◎●も無視することにはできないのではないか。個人別にみても、語別にみても特別な偏りもなく、一様に●●や◎●が聞かれるということは、第2拍さえ高ければ第1拍の高低にはなんら制約のないアクセントであることを示唆しているものと解する。さらに、「この鼻」に○●●●や●●●●（◎●●●）のような音調が聞かれることも、これを支持するであろう。

これに一般の助詞（「が・に・は・を」）が付くと、○●○、○●●といった音調が聞かれるが、稀には●●●（◎●●）もある。「牛を」から「水を」までの聴取機会全189回のうち、○●●は96回（50.8%）、○●○は86回（45.5%）、●●●（◎●●）は4回聞かれ、ほかに●○○が2回と●●○が1回あった。語別にみると、「風が・牛を」のごとく○●●が優勢なものと「梅が」のごとく○●○が優勢なものとは指摘できるが、全く一方の音調しか聞かれないという語はない。個人別には、大野小に一人○●●にしか言わない児童がおり、一方河内小には「風が」以外○●○にしか言わないという児童もいる。しかし、前者は「顔が」にのみ○●○も聞かれた。全体的に、河内小では○●○の音調が、また大野小では○●●の音調が、それぞれやや多いかとも思われる程度で、ここは一方の音調をもって代表させるわけにもいかない状態である。さらに、わずかながらではあるが、●●●（◎●●）や●●○などの音調も聞かれるということは、第1拍の高低も定まらないという印象を与える。また特定の語や個人に、ある種の音調が聞かれるというのではなく、二拍名詞第1類全体に（単独の場合も、一般の助詞が付いた場合も）数種の音調が聞かれる

のであり、この類の固有の音調は最低限第2拍が高ければよいという程度のものであるように思われる。

第2類はどうか。名詞単独の場合には、聴取機会全184回のうち●○の音調が聞かれたのは100回 (54.3%)、○●は71回 (38.6%)、ほかに●● (◎●) が13回 (7.1%) あった。これを第2拍の母音の広狭によってみると以下の表ようになる (数字は聴取回数、括弧内は%)。

	●○	○●	●●
第2拍広母音の場合	40 (43.5)	44 (47.8)	8 (8.7)
第2拍狭母音の場合	60 (65.2)	27 (29.3)	5 (5.4)
計	100 (54.3)	71 (38.6)	13 (7.1)

もちろん、第2拍の母音の広狭だけで判断はできない。狭母音ではあっても○●がまったく聞かれない語はなく、また広母音であっても●○の方が多く聞かれる場合もあるし (「川・旗・音」)、「歌」においては互いに拮抗する。

●○、○●、●●という3種の音調が聞かれるということは、この類の語にある特定の音調を決定させない。●●は少数ではあり、不完全な発音によるものと解することもできる。しかし、●○と○●とでは共通点が見いだせない。ただ、●●の方を典型的な音調とみて、●○も○●もこれの不完全な実現であるとみることもできなくはない。しかし、それならば●●が数の上でも多数を占めるはずであろうから、いまはそのような立場とはならない。二拍名詞第2類は、●○と○●と両様の音調が聞かれ、第2拍狭母音の場合には●○になる傾向がある、というにとどめておく。なお、「この川」には○●●○ (●●●○) と○●●● (◎●●●) とがともに聞かれる。

一般の助詞が付いた場合も、●○と○●とが多く聞かれ、○●●もあった (ほかに●●●1回、●●○2回)。これを名詞単独の場合にならって表にすれば、次のようである。

	●○○	○●○	○●●
第2拍広母音の場合	43 (41.0)	44 (41.9)	16 (15.8)
第2拍狭母音の場合	36 (40.9)	50 (56.8)	1 (1.1)
計	79 (40.9)	94 (48.7)	17 (8.8)

これによって明らかなように、もはや第2拍の母音による傾向の把握はできない。語別にみると、「寺に・胸が・旅は」のごときは○●○が圧倒的で、逆に「旗が・歌を・音が・橋を」については●○○になることが多い。人によりいずれの音調が出やすいかは違いもあるだろうが、といって一方の音調ばかりということもない。してみると、この場合も●○○

と○●○と、どちらの音調をもって代表させてよいか迷うことになるので、両者ともに挙げておくことにする。どちらも●●○の不完全な実現という立場もあろうが、音調レベルでは●●○の例がきわめて少ないことから、いまはとらない。

次に第3類を検討する。名詞単独では○●が圧倒的に多い。ほかに●● (◎●) と●○とが聞かれるが、●○は特定の語に集中する(「波・雲・事・靴」)。これらはおそらく、この地域で個別的に動いていて、そこに聞かれる○●の音調もその変化として捉えるべきであろう(大野小における「花・神・貝・鯛」も同様か)。両校ともに調査した15語について、聴取機会全198回のうち、○●は143回(72.2%)、●○は35回(17.7%)、●● (◎●)は20回(10.1%)であった。●○の多くが特定の語に集中して、別に扱った方がよいとすれば、第3類の代表的音調は○●となる。ところで、10%程度とはいえ、●● (◎●)があることにも注意しなければならない。それは、この音調が比較的多くの人に聞かれるからである。まったくこの音調が聞かれなかったのは13人中3人にすぎない。また語別にみても、その音調の聞かれる語に偏りはない。さらに、「この腹」の場合には、○●○● (●●○●)も聞かれはするが、○●●● (◎●●●)の方が多いことも考える必要がある。してみると、第3類名詞単独の音調は第1類の場合と同様第1拍の高低に制約がないものであろうことが結論できる。

一般の助詞が付いた場合は聴取機会全197回のうち、○●○が148回(75.1%)、●○○が24回(12.2%)、○●●が17回(8.6%)、●●● (◎●●)が5回(2.5%)、●●○が3回(1.5%)聞かれた。●○○の音調が、単独の場合の●○のように「波に・雲が・事が・靴を」に聞かれがちであるから、個別的に変化しているものと判断する(大野小における「花が・神が・貝が・鯛が」も同様か)。残る4種の音調は、○●○が圧倒的に多く聞かれるが、ほかの音調とても特定の語に限るわけではない。たしかに個人による音調の偏りは認められるが、○●●は13人中7人から聞かれること、単独の場合に●●の音調も無視したいことなどを勘案して、第3類に一般の助詞が付いた場合の固有の音調には第2拍が高いという制約以外のものはないと考えられる。

第4類名詞単独の場合は聴取機会全185回のうち、●○が139回(75.1%)、○●が41回(22.2%)、●● (◎●)が5回(2.7%)聞かれる。○●および●● (◎●)については、一部にまったく言わない人はいるものの、語別や個人別の偏りを特に認めることはできない。ともかく、第4類の代表的音調は●○であることは動かしがたく、●○と○●とを●●の不完全な実現とみるには、●●の数がいかにも少ない。「この空」という場合は、多く○●●○ (◎●●○)となってしまうが、なかに●●○●も聞かれた。

これに一般の助詞が付いても（聴取機会全182回）、●○○が147回（80.8%）と高い割合で聞かれるほかには○●○（21回 11.5%）と○●●（13回 7.1%）とがこれに次ぎ、●●●は1回（0.5%）しかない。

最後に第5類について述べる。単独の場合の聴取機会全185回のうち、●○が134回（72.4%）、○●が46回（24.9%）、●●が5回（2.7%）聞かれる。○●と●●のあらわれかたに特別な偏りもないが、「この鮒」が多く○●●○であるなかに、○●○●の音調も聞かれることを考えると、○●が●●の不完全な実現であるとはいえないように思う。なおまた、○●は聞かれなかった。

これに一般の助詞が付いた場合は（聴取機会全190回）、●○○が159回（83.7%）、○●○が27回（14.2%）、ほかに○●●が4回（2.1%）聞かれた。

以上、各類の名詞について、単独の場合と一般の助詞が付いた場合との、聴取した音調の結果を報告した。これらを代表的音調とそうでないものに分けて一覧すれば、次のようである（括弧内は聴取率%、また◎●は●●に含める）。

名詞単独の場合		一般の助詞が付いた場合		
	代表的音調	その他	代表的音調	その他
第1類	○● (77.6)	●● (20.8)	○●● (50.8)	●●● (2.1)
			○●○ (45.5)	●○○ (1.1)
				●●○ (0.5)
第2類	●○ (54.3)	●● (7.1)	○●○ (48.7)	○●● (8.6)
	○● (38.6)		●○○ (40.9)	●●○ (1.0)
				●●● (0.5)
第3類	○● (72.2)	●○ (17.7)	○●○ (75.1)	●○○ (12.2)
		●● (10.1)		○●● (8.6)
				●●● (2.5)
			●●○ (1.5)	
第4類	●○ (75.1)	○● (22.2)	●○○ (80.8)	○●○ (11.5)
		●● (2.7)		○●● (7.1)
				●●● (0.5)
第5類	●○ (72.4)	○● (24.9)	●○○ (83.7)	○●○ (14.2)
		●● (2.7)		○●● (2.1)

これらによって、山城谷地区の若年層のアクセント体系を推定すると以下のようなになる

(一般の助詞は「が」で代表させる。ほかに一拍名詞や助詞「も」の付いた場合も援用する)。⁽¹²⁾

／ ○ ○ ／	(二拍名詞第 1・3 類)
／ ○ ¹ ○ ／	(二拍名詞第 2・4・5 類の一部、一拍名詞+が)
／ ○ ○ ¹ ／	(二拍名詞第 2 類の一部)
／ ㇀○ ○ ／	(二拍名詞第 4 類の一部)
／ ㇀○ ○ ¹ ／	(二拍名詞第 5 類の一部)
／ ○ ○ ○ ／	(二拍名詞第 1・3 類+が)
／ ○ ¹ ○ ○ ／	(二拍名詞第 2・4・5 類の一部+が)
／ ○ ○ ¹ ○ ／	(二拍名詞第 1・3 類+も、二拍名詞第 2 類の一部+が)
／ ㇀○ ○ ○ ／	(二拍名詞第 4 類+が)
／ ㇀○ ○ ¹ ○ ／	(二拍名詞第 5 類+が)

2. 年配層のアクセント

年配層の代表的音調については、すでに森 (1958) などで報告されている。今回の調査は、それを補うものでしかない。具体例は付表に譲って、類別の音調を聴取率に添えて以下に示す。調査語は若年層と同じであるが、人数が 4 人なので聴取機会が 50 回程度に減っていることに注意されたい。

	名詞単独の場合		一般の助詞が付いた場合	
	代表的音調	その他	代表的音調	その他
第 1 類	●● (57.4)		○●○ (91.4)	●●○ (6.9)
	○● (42.6)			○●● (1.7)
第 2 類	●○ (89.3)	○●● (7.1)	●○○ (87.0)	○●○ (7.4)
		●● (3.6)		○●● (3.7)
				●●○ (1.9)
第 3 類	○● (68.3)	●● (20.0)	○●○ (86.6)	●○○ (6.7)
		●○ (11.7)		○●● (5.0)
				●●○ (1.7)
第 4 類	○● (85.7)	●● (10.7)	○●● (94.5)	○●○ (5.5)
		○● (1.8)		
		●○ (1.8)		
第 5 類	○● (89.1)	●● (7.3)	○●○ (85.8)	○●● (7.1)

第1類は、●●と○●とがほぼ半数ずつ聞かれる。これは、第1拍の高低になんら制約のないアクセントであるためにあらわれた音調であると解釈する。一般の助詞が付いた場合も同様であろう。すなわち／ $\text{L}\text{○○}^1 \text{○}/$ の実現ではなく、／ $\text{○○○}/$ の実現であると解する。第3類も同様である。

第2類の音調は、単独で●○、助詞付きで●○○にほぼ定まる。したがって／ $\text{○}^1 \text{○}/$ ／ $\text{○}^1 \text{○○}/$ の実現と考える。

第4・5類の場合は、単独では○●であって、音調に差はない。しかし、助詞が付くと○○●と○●○とに分かれるから、4類は／ $\text{L}\text{○○}/$ ／ $\text{L}\text{○○○}/$ 、5類は／ $\text{L}\text{○○}^1 /$ ／ $\text{L}\text{○○}^1 \text{○}/$ とみられる。

／ ○ ○ ／	(二拍名詞第1・3類)
／ $\text{○}^1 \text{○} /$	(二拍名詞第2類、一拍名詞第1・2類+が)
／ $\text{L}\text{○} \text{○} /$	(二拍名詞第4類、一拍名詞第3類+が)
／ $\text{L}\text{○} \text{○}^1 /$	(二拍名詞第5類)
／ ○ ○ ○ ／	(二拍名詞第1・3類+が) ⁽³⁾
／ $\text{○}^1 \text{○} \text{○} /$	(二拍名詞第2類+が)
／ ○ $\text{○}^1 \text{○} /$	(二拍名詞第1・3類+も)
／ $\text{L}\text{○} \text{○} \text{○} /$	(二拍名詞第4類+が)
／ $\text{L}\text{○} \text{○}^1 \text{○} /$	(二拍名詞第5類+が、第4類+も)

以上の考察は、従来第1・3・5類が統合して●○○とされてきたものを、音調レベルではともかく、アクセントの体系としては認めないということを意味している。第1・3類と第5類とを分けるべきだというのは、まず第1・3類単独の場合に●●の音調が一樣に無視できない数だけ存することによる。第5類にも●●は聞かれはした。しかし、これは付表からも明らかのように、外峯久延氏に限ることであるから注意を要する。さらに助詞が付いた場合に、第5類の○●●は「蛇が」に限ってあらわれており、●○○の聞かれる「琴を」とあわせて、個別的事情のあるものと考えたい。してみると、第5類の音調は年配層の場合ほぼ○●～○●○に安定することになる。一方第1・3類では●●○や○●●の音調が、語や人にかかわらず聞かれる。

もちろんこれだけでは、第1・3類を／ $\text{○○}/$ ／ $\text{○○○}/$ 、第5類を／ $\text{L}\text{○○}^1 /$ ／ $\text{L}\text{○○}^1 \text{○}/$ と解釈する論拠に乏しい。そこで、これらの語の前に、後ろへ高平に続く「～無い」という語を添えて発音してもらったところ、その音調は、「～無い鼻」○●●●、「～

無い腹」○●●● (○●◎●)、「～無い鮒」○●○●というものであった。(因みに第2・4類の場合は次のようである。「～無い川」○●●○ 「～無い空」○●○●₍₄₎)これによって第1・3類と第5類との違いは歴然とする。すなわち、第(4)5類はつねに低く始まるのに対して、第1・3類は必ずしも低く始まる必要のないアクセントである。したがって、アクセントの語類統合という観点からは、「山城谷式」は池田町などの讃岐式となら変わるところのないものといえるのであり、森(1958・1982)などの見解は訂正したい。

3. 山城谷アクセントの動向

山城谷地区が四国山地のほぼ中央に位置することはすでに述べたが、そのような地であっても、上記のようにアクセントは大きく変化している。そして、それらはアクセントの核を後退させたり、語頭を抬頭させて新たな核を第1拍に作っているのであって、アクセントの自律的变化とみる上に支障はない。以下に、その変化の概略を示す。

	名詞単独の場合		一般の助詞が付いた場合	
	年配層	若年層	年配層	若年層
第1・3類	●● =	●●	○●○ など	○●○ など
	○● =	○●		
第2類	●○ =	●○	●○○ =	●○○
	→	○●	→	○●○
第4類	○● →	●○	○●● →	●○○
第5類	○● →	●○	○●○ →	●○○

/ ○¹ ○ / > / ○ ○¹ /
 / l○ ○ / > / ○¹ ○ /
 / l○ ○¹ / > / ○¹ ○ /
 / ○¹ ○ ○ / > / ○ ○¹ ○ /
 / l○ ○ ○ / > / ○¹ ○ ○ /
 / l○ ○ ○ / > / ○¹ ○ ○ /

第2類の変化は、若年層で「この川」「この紙」が●●●●とも聞かれることから、低起式へ変化してはいないとみられる。

さて、年配層では音調の類似から第1・3・5類が統合と考えられていたが、この変化をみるに、やはり第1・3類と第5類とは統合にまでは進んでいなかったと判断される。

なんとになれば、一旦統合されたならば、特別の事情のないかぎり以後は同じ変化を遂げるはずであるのに、若年層では明らかに別の動きをしているからである。もちろん、この結論は、山城谷の変化をアクセントの自律的变化と考えてのことではある。近辺に有力なアクセントがあり、それからの頻繁な借用、さらには類推が行われれば、事情は一変する。しかし、第2類を○●(助詞付きで○●○)、第4・5類を●○(同じく●○○)にいうような所は、少なくとも年配層については付近にない。⁽⁵⁾さらに東京アクセントの影響も検討すべきであろうが、それとともこうも規則的に影響するとは思えない。⁽⁶⁾さらに、山城谷アクセントそのもののなかに、二拍名詞以外にも同類の変化を指摘できることは、これがアクセントの自律的变化であることを示唆しているように思われる。たとえば、二拍動詞第2類「立つ・差す」などは年配層で○●に聞かれるが、若年層では●○となって第1類と合流する。この完了形「立った・差した」は、年配層でそれぞれ○○●・○●○であるが、若年層では●○○になる。また、三拍動詞第2類完了形「逃げた・生えた」なども、○●○から●○○へと変化しているのである。こうしてみると、いずれ山城谷アクセントは次のようなアクセントになるであろう。ここにいたって、初めて3次アクセントとよぶにふさわしくなる。

- ／ ○ ○ ／ (二拍名詞第1・3類)
- ／ ○¹ ○ ／ (二拍名詞第4・5類、一拍名詞+が)
- ／ ○ ○¹ ／ (二拍名詞第2類)
- ／ ○ ○ ○ ／ (二拍名詞第1・3類+が)
- ／ ○¹ ○ ○ ／ (二拍名詞第4・5類+が)
- ／ ○ ○ ○¹ ○ ／ (二拍名詞第2類+が、第1・3類+も)

本稿では、いわゆる「山城谷式」の若年層のアクセントを報告して、それを年配層と比較し、その変化の実態を考察してきた。森(1984・1989)によれば、「出合式」や「垂井式」との接触地域の変化はきわめて複雑で、地域の人口や校区の変更など様々な要素を勘案しなければならないという。さらに同次アクセント間の「横すべり」まで想定するとなると、それをアクセントの類の統合の原則で説明することは困難になろう。しかし、少なくとも山城谷地区のアクセント変化は、統合の原則の範囲内において説明がつくことが明らかになった。

山城谷がこうであれば、同じアクセントとされる一字・端山・八千代などの状態も気になるし、「出合式」も検討の余地を残すのではないと思われる。さらには下降式アクセントの有無も問題になろうが、今後の本研究会の課題としたい。

- 注(1) 第3類に属しながら「波・雲・事・靴・花・神・貝・鯛」などは、個別に第2類の諸語とともに動いているようである。とすれば、これらがときに○●と聞かれても、それは第3類の枠内ではかり考える必要はなくなる。第2類の諸語は単独で●○にも○●にも聞かれるが、その○●の音調に当たるものとして位置付ける方がよいであろう。
- (2) 二拍名詞第4・5類に低起のものも認められることはよいとして、それらが第2拍の核の有無によって分けられるかどうかは、じつは今回の調査では明らかではない。ここは、後述する年配層の体系にならって二分したにすぎない。若年層の場合、これらに一般の助詞が付いた音調は、低起と思われる○●○と○●●との両音調がそれぞれに聞かれ、聴取回数から判断することは難しい。したがって、これを変化という観点からみたとき、この段階ですでに統合していると考えられもするし、この段階ではまだ区別を保っており、次の●○○に至って初めて統合するという解釈も成り立つと思われる。
- (3) 本稿の筆者の一人である森は、ここで／○○／／○○／としたものについて、それぞれの第2拍にアクセント核がある型に近いものとみる。
- (4) これらは、外峯トラノ氏、外峯久延氏、外峯日出子氏の三人に聞いた結果である。第3類の「～無い腹」について、外峯日出子氏にのみ○●●という音調が聞かれたが、ほかはこの通りであった。日出子氏の音調は2語を区切る意識で発音されたものであろう。
- (5) 年配層のアクセントをみるかぎり、付近に同類のものはない。しかし、付近の若年層は山城谷地区と類似した変化をしていることが、森(1989)から窺うことができる。とくにこの地区の南にある大歩危・小歩危あたりでは第1類を○●●に、また第3類を●○○にいうほかは、ほぼ山城谷地区と同様の変化を遂げている模様で、山城谷の若年層に聞かれる第1類○●●の音調(今回の調査では50.8%)をその影響とみることもできる。本稿の筆者の一人である森は、むしろその見解をとる(注3参照)。
- (6) 山城谷地区は近隣の都市アクセントとしては池田町のそれを考えれば足るほどの、いわば都市・地域ともに讃岐式アクセントのところである。このような地域の場合に、東京(テレビ)アクセントに染まりづらいことは、馬瀬(1961)などからも容易に推測される。もちろんそれぞれの語の使用度など、個別的には事情も異なるが、若年層の変化が類別にこれほど規則的であることを、アクセントの自律的变化抜きに説明することは困難に思える。ただ、変化の結果が東京式に類似していることから、東京(テレビ)アクセントが、変化を支え、促す方向にはたらいっていることは認めなければならないまい。

【参考文献】

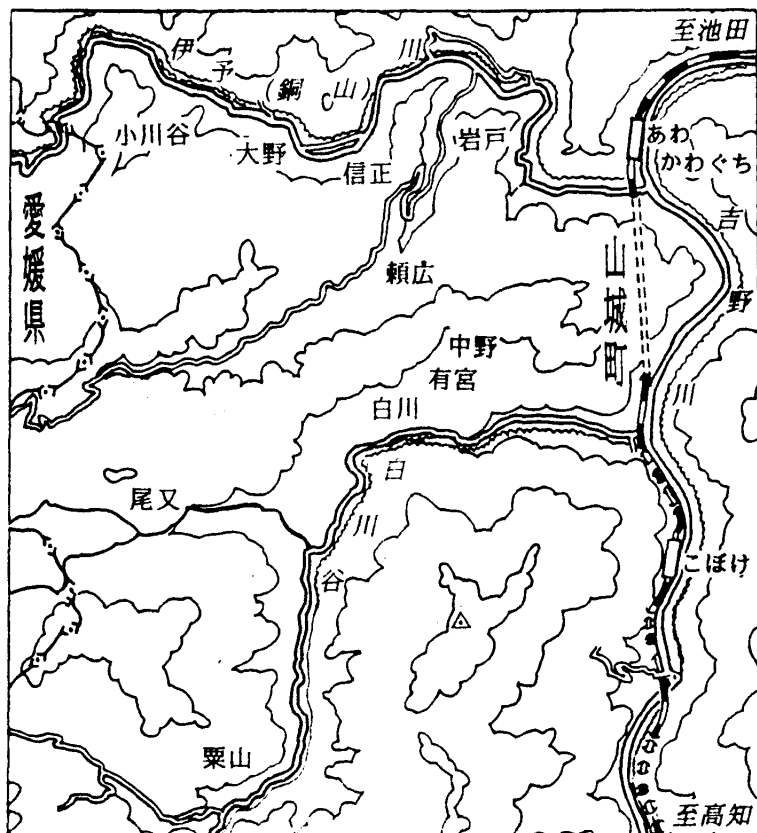
- 上野 善道 (1985) 「日本本土諸方言アクセントの系譜と分布(1)」
『日本学士院紀要』40-3
- 金沢 治 (1934) 『阿波言葉のアクセント』(私家版)
(1951) 『阿波に於けるアクセントの研究』(私家版)
- 金田一春彦 (1974) 『国語アクセントの史的研究 原理と方法』(塙書房)
(1977) 「アクセントの分布と変遷」
『岩波講座日本語11 方言』(岩波書店)
- 佐藤 亮一 (1976) 「地域社会の共通語化」
『講座方言学3——方言研究の問題——』(国書刊行会)
- 徳川 宗賢 (1862) 「“日本諸方言アクセントの系譜”試論——「類の統合」と「地理
的分布」から見る——」 『学習院大学国語国文学会誌』6
(1981) 『言葉・西と東』日本語の世界8 (中央公論社)
- 平山 輝男 (1957a) 「四国方言のアクセント体系とその系譜 付. アクセント境界線」
『音声の研究』Ⅷ (日本音声学会)
(1957b) 『日本語音調の研究』(明治書院)
- 馬瀬 良雄 (1961) 「言語形成に及ぼすテレビおよび都市の言語の影響」
『国語学』125
- 宮城 文雄 (1961) 「方言の実態と共通語化の問題点 香川・徳島」
『方言学講座 3 西部方言』(東京堂出版)
- 三好昭一郎他 (1976) 『角川日本地名大辞典 36徳島県』(角川書店)
- 森 重幸 (1958) 「徳島県のアクセント概観」 『国文論叢 (神戸大)』7
(1960) 「徳島県のアクセント概観——二音節名詞の考察——」
『西部地区国語教育協議会要録』
(1961) 「徳島県のアクセント」 『郷土研究発表会紀要』6・7・8合併号
(1982) 「徳島県の方言」
『講座方言学8——中国・四国地方の方言——』(国書刊行会)
(1984) 「徳島県三好郡池田町三縄(旧三縄村) 出合アクセントと川崎ア
クセント——二音節名詞アクセント体系の変化——」(私家版)
(1989) 「徳島県の方言アクセント概観——32年後の動向——」(私家版)
- 山名 邦男 (1956) 「徳島県下の音調」 『兵庫方言』1

(付記) 今回の調査に際し、河内小学校校長宇山文夫先生と大野小学校教頭下泉春男先生には、いろいろ便宜をはかっていただきました。ここに記して、厚く御礼申し上げます。

(うえの・かずあき 総合科学部助教授)

(せんば・みつあき 総合科学部助教授)

(もり・しげゆき 総合科学部非常勤講師)



【付表】山城谷地区のアクサセント

●○◎◎は、それぞれ意拍・低拍・中感拍・下感拍をあらわす。盛力者の姓の後のM・Fは性別、下段は生年（西暦）と生育地（字）名。音韻の空欄は未調査。

二拍名詞第1類

宮田M 77有宮	平田M 77中野	平石M 77中野	藤川F 77白川	内田F 77白川	玉岡F 77白川	滝口F 77栗山	佐野M 78大野	黒川M 78細広	土橋M 77信正	下大寺F 77大野	佐竹F 77細広	行川F 77小川谷	種岡M 24尾又	外家(ト)F 05小川谷	外家(久)M 28小川谷	外家(白)F 34岩戸
牛	牛	牛	牛	牛	牛	牛	牛	牛	牛	牛	牛	牛	牛	牛	牛	牛
梅	梅	梅	梅	梅	梅	梅	梅	梅	梅	梅	梅	梅	梅	梅	梅	梅
枝	枝	枝	枝	枝	枝	枝	枝	枝	枝	枝	枝	枝	枝	枝	枝	枝
柿	柿	柿	柿	柿	柿	柿	柿	柿	柿	柿	柿	柿	柿	柿	柿	柿
風	風	風	風	風	風	風	風	風	風	風	風	風	風	風	風	風
首	首	首	首	首	首	首	首	首	首	首	首	首	首	首	首	首
酒	酒	酒	酒	酒	酒	酒	酒	酒	酒	酒	酒	酒	酒	酒	酒	酒
笹	笹	笹	笹	笹	笹	笹	笹	笹	笹	笹	笹	笹	笹	笹	笹	笹
底	底	底	底	底	底	底	底	底	底	底	底	底	底	底	底	底
竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹	竹
鳥	鳥	鳥	鳥	鳥	鳥	鳥	鳥	鳥	鳥	鳥	鳥	鳥	鳥	鳥	鳥	鳥
霜	霜	霜	霜	霜	霜	霜	霜	霜	霜	霜	霜	霜	霜	霜	霜	霜
鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻	鼻
水	水	水	水	水	水	水	水	水	水	水	水	水	水	水	水	水
鈴	鈴	鈴	鈴	鈴	鈴	鈴	鈴	鈴	鈴	鈴	鈴	鈴	鈴	鈴	鈴	鈴
船	船	船	船	船	船	船	船	船	船	船	船	船	船	船	船	船
腹	腹	腹	腹	腹	腹	腹	腹	腹	腹	腹	腹	腹	腹	腹	腹	腹
口	口	口	口	口	口	口	口	口	口	口	口	口	口	口	口	口
道	道	道	道	道	道	道	道	道	道	道	道	道	道	道	道	道
桃	桃	桃	桃	桃	桃	桃	桃	桃	桃	桃	桃	桃	桃	桃	桃	桃
牛を	牛を	牛を	牛を	牛を	牛を	牛を	牛を	牛を	牛を	牛を	牛を	牛を	牛を	牛を	牛を	牛を
梅が	梅が	梅が	梅が	梅が	梅が	梅が	梅が	梅が	梅が	梅が	梅が	梅が	梅が	梅が	梅が	梅が
枝を	枝を	枝を	枝を	枝を	枝を	枝を	枝を	枝を	枝を	枝を	枝を	枝を	枝を	枝を	枝を	枝を
柿が	柿が	柿が	柿が	柿が	柿が	柿が	柿が	柿が	柿が	柿が	柿が	柿が	柿が	柿が	柿が	柿が
風が	風が	風が	風が	風が	風が	風が	風が	風が	風が	風が	風が	風が	風が	風が	風が	風が
首が	首が	首が	首が	首が	首が	首が	首が	首が	首が	首が	首が	首が	首が	首が	首が	首が
酒が	酒が	酒が	酒が	酒が	酒が	酒が	酒が	酒が	酒が	酒が	酒が	酒が	酒が	酒が	酒が	酒が
笹が	笹が	笹が	笹が	笹が	笹が	笹が	笹が	笹が	笹が	笹が	笹が	笹が	笹が	笹が	笹が	笹が
底が	底が	底が	底が	底が	底が	底が	底が	底が	底が	底が	底が	底が	底が	底が	底が	底が
竹が	竹が	竹が	竹が	竹が	竹が	竹が	竹が	竹が	竹が	竹が	竹が	竹が	竹が	竹が	竹が	竹が
鳥が	鳥が	鳥が	鳥が	鳥が	鳥が	鳥が	鳥が	鳥が	鳥が	鳥が	鳥が	鳥が	鳥が	鳥が	鳥が	鳥が
霜を	霜を	霜を	霜を	霜を	霜を	霜を	霜を	霜を	霜を	霜を	霜を	霜を	霜を	霜を	霜を	霜を
鼻が	鼻が	鼻が	鼻が	鼻が	鼻が	鼻が	鼻が	鼻が	鼻が	鼻が	鼻が	鼻が	鼻が	鼻が	鼻が	鼻が

二拍名詞第4類

宮田 ^Y 77有宮	平田 ^Y 77中野	平石 ^Y 77中野	瀬川 ^F 77白川	内田 ^F 77白川	玉岡 ^F 77白川	滝口 ^F 77栗山	佐野 ^Y 78大野	黒川 ^Y 78細広	土橋 ^Y 77居正	下大寺 ^F 77大野	佐竹 ^F 77種広	行川 ^F 77小川谷	櫛岡 ^Y 24尾又	外臺(下)F 05小川谷	外臺(久)Y 28小川谷	外臺(日)F 34岩戸
息 永 福	息 永 福	息 永 福	息 永 福	息 永 福	息 永 福	息 永 福	息 永 福	息 永 福	息 永 福	息 永 福	息 永 福	息 永 福	息 永 福	息 永 福	息 永 福	息 永 福
白 海 帯 傘 敷 屑	白 海 帯 傘 敷 屑	白 海 帯 傘 敷 屑	白 海 帯 傘 敷 屑	白 海 帯 傘 敷 屑	白 海 帯 傘 敷 屑	白 海 帯 傘 敷 屑	白 海 帯 傘 敷 屑	白 海 帯 傘 敷 屑	白 海 帯 傘 敷 屑	白 海 帯 傘 敷 屑	白 海 帯 傘 敷 屑	白 海 帯 傘 敷 屑	白 海 帯 傘 敷 屑	白 海 帯 傘 敷 屑	白 海 帯 傘 敷 屑	白 海 帯 傘 敷 屑
今日 空 著 船 松 父	今日 空 著 船 松 父	今日 空 著 船 松 父	今日 空 著 船 松 父	今日 空 著 船 松 父	今日 空 著 船 松 父	今日 空 著 船 松 父	今日 空 著 船 松 父	今日 空 著 船 松 父	今日 空 著 船 松 父	今日 空 著 船 松 父	今日 空 著 船 松 父	今日 空 著 船 松 父	今日 空 著 船 松 父	今日 空 著 船 松 父	今日 空 著 船 松 父	今日 空 著 船 松 父
息 永 福 を 白 海 に 帯 を 傘 を 敷 を 屑 が	息 永 福 を 白 海 に 帯 を 傘 を 敷 を 屑 が	息 永 福 を 白 海 に 帯 を 傘 を 敷 を 屑 が	息 永 福 を 白 海 に 帯 を 傘 を 敷 を 屑 が	息 永 福 を 白 海 に 帯 を 傘 を 敷 を 屑 が	息 永 福 を 白 海 に 帯 を 傘 を 敷 を 屑 が	息 永 福 を 白 海 に 帯 を 傘 を 敷 を 屑 が	息 永 福 を 白 海 に 帯 を 傘 を 敷 を 屑 が	息 永 福 を 白 海 に 帯 を 傘 を 敷 を 屑 が	息 永 福 を 白 海 に 帯 を 傘 を 敷 を 屑 が	息 永 福 を 白 海 に 帯 を 傘 を 敷 を 屑 が	息 永 福 を 白 海 に 帯 を 傘 を 敷 を 屑 が	息 永 福 を 白 海 に 帯 を 傘 を 敷 を 屑 が	息 永 福 を 白 海 に 帯 を 傘 を 敷 を 屑 が	息 永 福 を 白 海 に 帯 を 傘 を 敷 を 屑 が	息 永 福 を 白 海 に 帯 を 傘 を 敷 を 屑 が	息 永 福 を 白 海 に 帯 を 傘 を 敷 を 屑 が
今日 空 著 船 松 父	今日 空 著 船 松 父	今日 空 著 船 松 父	今日 空 著 船 松 父	今日 空 著 船 松 父	今日 空 著 船 松 父	今日 空 著 船 松 父	今日 空 著 船 松 父	今日 空 著 船 松 父	今日 空 著 船 松 父	今日 空 著 船 松 父	今日 空 著 船 松 父	今日 空 著 船 松 父	今日 空 著 船 松 父	今日 空 著 船 松 父	今日 空 著 船 松 父	今日 空 著 船 松 父

二拍名詞第五類

宜田M 77有宮	平田M 77中野	平石M 77中野	瀬川F 77白川	内田F 77白川	玉國F 77白川	遠口F 77栗山	佐野M 78大野	鳳山M 78坂広	土橋M 77信正	下大寺F 77大野	佐竹F 77坂広	行川F 77小川谷	赤 秋 汗 兄 雨	橋岡M 24尾又	外家(ト)F 05小川谷	外家(久)M 28小川谷	外家(日)F 34岩戸
赤	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	赤	●	●	●	●
秋	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	秋	●	●	●	●
汗	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	汗	●	●	●	●
兄	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	兄	●	●	●	●
雨	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	雨	●	●	●	●
橋	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	橋	●	●	●	●
蜘蛛	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	蜘蛛	●	●	●	●
戸	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	戸	●	●	●	●
穿	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	穿	●	●	●	●
環	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	環	●	●	●	●
雀	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	雀	●	●	●	●
昔	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	昔	●	●	●	●
樹	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	樹	●	●	●	●
蛇	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	蛇	●	●	●	●
窓	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	窓	●	●	●	●
窓	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	窓	●	●	●	●
赤が	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	赤が	●	●	●	●
秋は	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	秋は	●	●	●	●
汗を	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	汗を	●	●	●	●
兄が	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	兄が	●	●	●	●
雨が	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	雨が	●	●	●	●
橋が	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	橋が	●	●	●	●
蜘蛛を	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	蜘蛛を	●	●	●	●
戸を	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	戸を	●	●	●	●
環を	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	環を	●	●	●	●
雀が	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	雀が	●	●	●	●
昔が	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	昔が	●	●	●	●
樹が	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	樹が	●	●	●	●
蛇が	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	蛇が	●	●	●	●
窓を	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	窓を	●	●	●	●